

自律学習の観点から 見た学生による研究 テーマの選択と変更

林 恒立

2018年12月15日

1. はじめに（本日の流れ）

1. はじめに（本日の流れ）

（「助教」制度について）

（「研究生プログラム」の紹介）

2. 授業内容

3. 問題点

4. 「専題研究」への示唆

1. はじめに（「助教」制度について）

21. 助教 (jù jiào)

大學中具有學士學位協助行政工作或教學的人。

N : teaching or research assistant.

例：他大學畢業後，便留在學校當助教。

講師 (jiǎng shī)

大學最初級的老師。

N : an instructor.

例：今年暑假，他由講師升為副教授。

1. はじめに（「助教」制度について）

日本の国立大学の場合

2007年度より以前

教授

助教授

講師（担当授業あり）

助手（担当授業なし）

2007年度以降

教授

准教授

講師（担当授業あり）

助教（担当授業あり）

助手（担当授業なし）

Professor

Associate Professor

Senior Lecturer

Assistant Professor

Research Associate

特任〇〇（任期付き）

1. はじめに（「助教」制度について）

私立大学の場合

早稲田大学商学学術院（各学部・大学院によって規定が異なる）

- 助教 ・ ・ ・ 博士号（最長3年間、博士課程修了生応募可能）
- 助手 ・ ・ ・ 修士号（最長3年間、博士課程院生応募可能）

教 員 公 募

メディア・コミュニケーション研究院では、助教職を優れた教員或いは研究者等の養成のためのキャリアパスの第一段階と位置づけ、併せて優秀な人材の適切な確保と人材の流動性を諮ることを目的に下記のとおり募集いたします。

- | | |
|---------|--|
| 1. 職 名 | 助 教 |
| 2. 人 員 | 1 名 |
| 3. 勤務形態 | 常 勤 |
| 4. 任 期 | 2 年 |
| 5. 採用時期 | 平成 2 8 年 4 月 1 日 |
| 6. 職務内容 | 研究及び教育、その他、必要とされる関連業務 |
| 7. 応募資格 | ① 国際広報メディア研究科及び国際広報メディア・観光学院国際広報メディア専攻の博士後期課程を修了（学位取得）した者（見込みを含む）（博士後期課程単位修得退学後 1 年以内に課程博士の学位を取得した者を含む。） |

1. はじめに（「助教」制度について）

- 研究と教育（研究生プログラム、全学教育科目：中国語演習）
- 学生からの相談等（通年）
- 院生・研究生PCおよびネットワーク、共用プリンターの管理（通年）
- 院生図書資料室の管理（図書・雑誌、学位論文の貸し出し）（通年）
- 新入生ガイダンス（年2回）、研究生ガイダンス（年2回）
- 大学院入試説明会（年2回）、大学院入試監督（年2回）
- 大学院中間発表会（年1回）
- 同窓会（ホームカミングデー）（年1回）

1. はじめに（「研究生プログラム」）

研究生（research student）とは

「特定の研究課題について指導教員の下で研究を進める学生」のこと。

（北海道大学ホームページ「北大で学ぶ」より）

→ 大学院生（graduate student）ではない

→ 研究期間が終わって帰国する外国人研究生は皆無（現状）

ほとんどの外国人研究生が、大学院への入学を目指す（現状）

1. はじめに（「研究生プログラム」）

「研究生の一日」 **（before）**

- 午前 08:45 ～ 10:15 日本語の授業（国際連携機構＝旧・留学生センター）参加自由
10:30 ～ 12:00 日本語の授業（同上）参加自由
- 午後（フリータイム）
 - ・ 指導教員との面談（各指導教員によって頻度が異なる）
 - ・ 大学院（修士課程）の授業の聴講
 - ・ アルバイト

1. はじめに（「研究生プログラム」）

- 「研究生の一日」（before）をご覧ください、
- どのような問題点が考えられるのか
- なぜ、「研究生プログラム」をはじめる必要があったのか

1. はじめに（「研究生プログラム」）

- 入学後、指導教員に連絡せず、バイトに明け暮れて、「研究」に手がつかないというケースが増え
- 学術的文章の書き方の基本が分からないという研究生が多く、また、指導教員は日本語教育の専門ではないため、指導しきれないという
(逆に、指導教員が出張などで忙しく、面倒を見ることができないというケースも)
- 大学院（修士課程）の授業を聴講することはできるが、院試を理由に途中で辞退する研究生が多かった（授業の担当教員にとっても、受講生にとっても、迷惑）

→ 研究科内の「留学生委員会」によって発足

1. はじめに（「研究生プログラム」）

「研究生の一日」 (After)

- 午前 08:45 ～ 10:15 日本語の授業（国際連携機構＝旧・留学生センター）参加自由
10:30 ～ 12:00 日本語の授業（同上）参加自由
- 午後（フリータイム）
14:45～16:30 「研究生プログラム」（火、水、木）参加自由

その他

- ・ 指導教員との面談（各指導教員によって頻度が異なる）
- ・ 大学院の授業の聴講 → 途中来なくなった人が多かったため、**廃止**
- ・ アルバイト

2. 授業内容

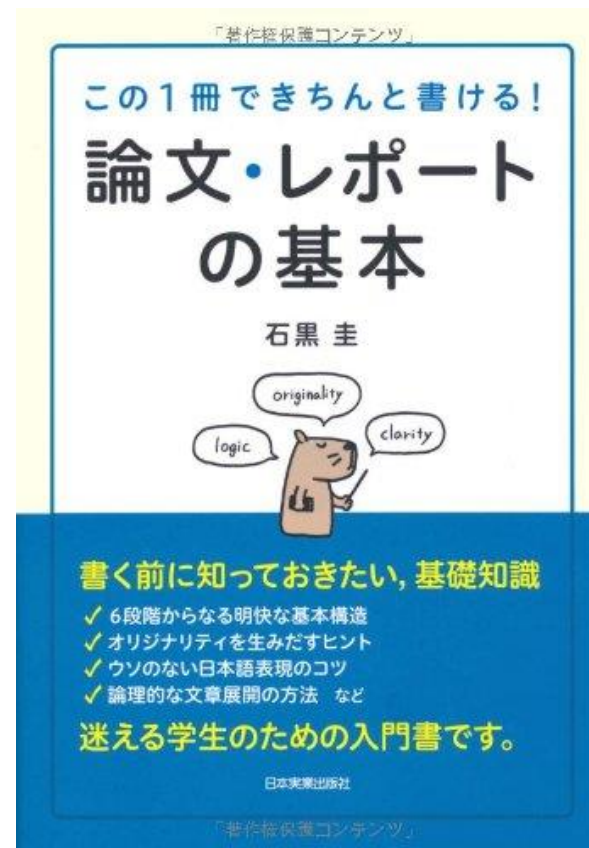
「これから始める研究の基礎の基礎」

- 17名（中国15名、香港1名、シンガポール1名）
- 日本語能力も研究分野も異なっている
- 週に一回、論文・小論文の書き方（アカデミック・ジャパニーズ）をはじめ、人文・社会科学系分野の研究方法について学ぶ
- 各研究生には、指導教員がつくが、指導の方法や面談の頻度は各指導教員の裁量に任されている
- それに立ち入らず、あくまで大学院のスタッフの一人として、日本語文章の書き方を教え、研究方法の種類を紹介した

2. 授業内容

- 導入・ガイダンス（1回目） 漢語の練習（例：「原因」「理由」）
- 第一セクション（2～5回目） 先行研究の探し方、引用の方法
- 第二セクション（6～9回目） 研究法の種類
- 第三セクション（10～13回目） 自己訂正、研究倫理

2. 授業内容



3. 問題点（書き方）

- 引用か、自分の意見か、はっきりしない書き方
- 話し言葉「でも」「と思う」の愛用
 - 課題のコメントで書いても、なかなか直らない
- 専門用語の独自の創作、または中国語からの直訳
 - 例：「社交サービス」 （「ソーシャル・ネットワーク・サービス」）
 - 「大衆の断片化」 （？）
 - 「読者範囲」 （「読者層」）
 - 「中日」「韓日」 （「日中」、「日韓」）

学習者オートノミーを育てるための 教師／アドバイザーの役割（青木2009）

やらなければならないこと

- 何が求められているかを学習者に理解してもらう
- 質問する
- 話を聞く
- 承認する
- 選択肢を提供する
- 専門家として情報を提供する
- 一人一人の学習のプロセスに関心を持つ
- 学習者が立てた学習計画を必ずフォローする
- ポジティブな態度で臨む

学習者オートノミーを育てるための 教師／アドバイザーの役割（青木2009）

やってはいけないこと

- 学習者の頭越しに物事を決める
- 学習者が自分でできることをやってしまう（悪魔のサービス）
- 求められていない情報を提供する
- 覚えた言葉の正確さや量だけを問題にする
- 母語話者の規範を押し付ける

<意見求む>

学習者オートノミーを育てる際に教師・アドバイザーがやってはいけないこと

- 「母語話者の規範を押し付ける」

→ 論文・小論文の場合、話し言葉と異なって、「『でも』の代わりに、『しかし』を使ったほうがいいよ」というふうに指導すると、「母語話者の規範を押し付ける」ことになるのか。

→ 学習者が論文・小論文の中で、何度でも「でも」を使ったり、または「『日中』ではなく、どうしても『中日』が使いたい」と言ってきた場合、どのように対応すればいいのか。

「悪魔のサービス」なのか

- 「学習者が自分でできることをやってしまう」

→ 大学院入試の前に、「研究計画書」の添削や、「小論文」（過去問を使っ
ての練習）の添削を頼んでくる

[悪魔のサービス？.pdf](#)

3. 問題点（テーマの選択）

- テーマ設定が膨大過ぎる（修士課程の2、3年間で終わるはずのないテーマ）
- 二番煎じ（先行研究の足りないところを考えずにとりあえず真似してみる）
- 流行りに乗る（トレンド、ホットワードだけ見て、かっこいい！と）

例：

- 南京事件（先輩がやっているから）
- 2008年毒餃子事件（先輩がやっているから）
- ソーシャルゲーム（流行っているから）
- フェイクニュース（流行っているから）

3. 問題点（テーマの変更）

- テーマをコロコロ変える

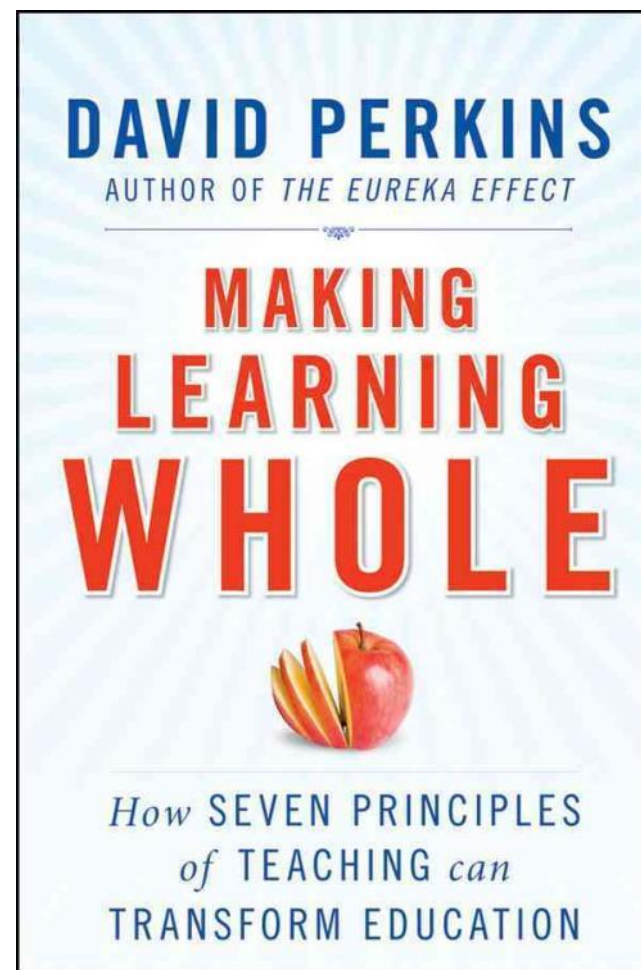
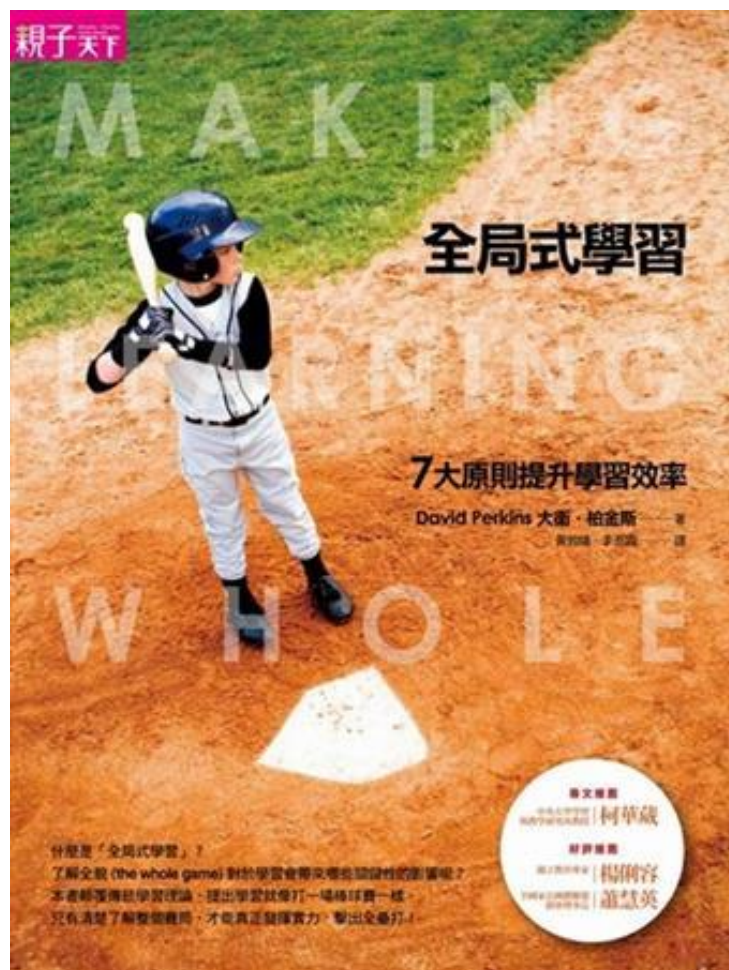
Rさんの場合 自動詞・他動詞の習得 → 授受動詞の習得

Kさんの場合 南京事件の報道 → 上野動物園のパンダの報道

Bさんの場合 ニューメディアについて → フェイクニュースについて

Sさんの場合 ドキュメンタリーのカメラワーク → ソーシャルゲーム

全局式學習 (Making Learning Whole)



「心智理論（hearts-and-minds theory）」の間違い

* 心の理論（Theory of mind, ToM）とは異なる

- 多數人的學習經驗似乎都反映了「心智理論」：

只要把它放在心上，記在腦子裡，下次就會做得更好。

（David Perkins 著，黃敦晴、李岳霞譯，『全局式學習』p.73）

- Most of my experience as a learner – and I bet your memories are not very different – seems to reflect what we'll call the hearts-and-minds theory:

Take it to heart, keep it in mind, and do better next time.

（David Perkins, *Making Learning Whole*, p.80）

「心智理論（hearts-and-minds theory）」の間違い

* 心の理論（Theory of mind, ToM）とは異なる

- 有學生交了關於黑人民權鬥士金恩博士的小論文。幾天後小論文發回來時，上面除了成績以外，也有像是「令人矚目的開頭，但是這裡失去力道」和「需要多點證據」的評語。同樣的，老師希望學生將評語放在心上、牢牢記住，下回寫的小論文能多一點力道與證明。

（David Perkins 著，黃敦晴、李岳霞譯，『全局式學習』 p.74）

- A student hands in an essay on Martin Luther King and gets it back a couple of days later with a grade and a few comments like “compelling beginning” but “loses momentum here” and later “needs more evidence.” The hope is that the student takes this to heart, keeps it in mind, and brings plenty of momentum and evidence to future essays.

（David Perkins, *Making Learning Whole*, p.81）

「心智理論（hearts-and-minds theory）」の間違い

* 心の理論（Theory of mind, ToM）とは異なる

- 假設一：即使馬上又要進入下一個主題，學生還是會想改進自己出錯的地方；學生不只在乎成績，也在乎老師給的回饋。他們會試著把評語牢記在心，未來遇到類似問題時會記得該怎麼做。

（David Perkins 著，黃敦晴、李岳霞譯，『全局式學習』p.74）

- Hearts-and-minds theory assumes that the heart is there, that learners care about improving the performance in question, care even though the class is now moving on to the next topic, care enough to pay attention not just to the grade but to the feedback, trying to remember it and put it to work when attempting similar tasks in the future.

（David Perkins, *Making Learning Whole*, p.81）

「心智理論（hearts-and-minds theory）」の間違い

* 心の理論（Theory of mind, ToM）とは異なる

- 假設二：學生對該主題有足夠的理解力，能夠明白這些零散的評語所要表達的意義，並有效運用。另外，心智理論還假設學生很快就會有新的嘗試機會。

→ 事實上，他們多半沒有那樣的機會。幾週後再次嘗試一樣的練習時，即使是最投入的學生也不太可能會記得住這些評語。

（David Perkins 著，黃敦晴、李岳霞譯，『全局式學習』 p.74）

- Hearts-and-minds theory assumes minds with enough understanding of the topic to make sense of relatively sparse feedback and use it effectively. For yet another, the hearts-and-minds theory proceeds as though the learners will have an opportunity to try again soon.

→ Very often they do not. Even the most committed hearts and agile minds are not likely to hold onto feedback well enough to inform a second try weeks from now, say on the final exam or when the next essay is due.

（David Perkins, *Making Learning Whole*, p.81）

「善用選擇」

- 選擇，是燃起熱情的好方法。當學習者覺得他們可以選擇聚焦在什麼事以及如何進行時，他們較有可能表現出內在動機，並追求更全面深入的學習。
- J.W. Brehm (1966) 「抵抗」作為一種動機模式
- 當人們知道自已的自由被限制時，所發出的回應就是「抵抗」。
- 從根本的宗教與政治觀點到一些小規定，例如禁菸政策和禁止丟垃圾。人們傾向以負面方式回應限制，從消極的抗拒、輕微的破壞活動到毫無保留的大規模反駁。

（David Perkins 著，黃敦晴、李岳霞譯，『全局式學習』pp.66-67）

Making the Most of Choice

- One fine way of stoking enthusiasm is choice. For a rule of thumb, when learners feel that they have a choice about just where they focus their attention and just how they proceed, they are more likely to show intrinsic motivation and, along with, this broader and deeper learning.
- J.W. Brehm (1966) *reactance* as a motivational pattern
- There is a name for people's response when they perceive that their freedoms have been restricted.
- From fundamental matters of religious and political options to minor fetters such as no smoking policies or littering laws. People tend to react negatively to constraints in ways that range from passive resistance to minor sabotage to outright large-scale rebellion.

(David Perkins, *Making Learning Whole*, p.71)

「善用選擇」

- Ellen Langer 和同事提出了「條件式指導」（conditional instruction）
- 使用較少絕對性的字眼，多用「可能是」、「也許是」等詞彙。這種語言風格讓學習者能有更多參與感與決定權。這裡的重點並不是每一件事都要開放選擇，而是點出很多指導方式的設計本身就絕對專制，使學習者無法做出有意義的選擇，並降低了他們的內在動機與參與感。
- 很多研究已經證明：人們擁有選擇時，會比沒有選擇時更投入學習。
（David Perkins 著，黃敦晴、李岳霞譯，『全局式學習』p.68）

Making the Most of Choice

- Ellen Langer and colleagues introduced the idea of *conditional instruction*
- Where the language included fewer absolutes and more phrases like “could be” and “may be.” Such locutions invite learners to engage with the content and make up their own minds. Systematic studies demonstrated that retention of information was just as good, while use of the information in creativity and problem solving was better. The point is not so much that everything should be up for grabs as it is that many settings of instruction have an utterly absolutist character that deprives learners of meaningful choice and reduces their intrinsic motivation and engagement.
- A number of studies have demonstrated that a few choices yield more engagement and deeper learning than none.

(David Perkins, *Making Learning Whole*, pp.72-73)

「全局式學習」 (learning by whole) の七原則

- 掌握全局 (Play the whole game.)
- 讓課題值得學習 (Make the game worth playing.)
- 加強困難的部分 (Work on the hard parts.)
- 客場經驗 (Play out of town.)
- 發覺隱藏的層面 (Uncover the hidden game.)
- 向隊友及其他團隊學習 (Learn from the team...and the other teams.)
- 學會學習 (Learn the game of learning.)

(David Perkins 著，黃敦晴、李岳霞譯，『全局式學習』 p.11)

4. 「専題研究」への示唆

- 「自由」（テーマの選択と変更）
- 「抵抗」（母語話者の規範）
- 「選択」
- 「承認する」／「学習者が立てた学習（研究）計画を必ずフォローする」
- 「悪魔のサービス」

をキーワードに、

「専題研究」のテーマがなかなか決まらない・コロコロ変える学生を助ける方法を考えてみませんか。